

## 台湾アミ族の水田稲作

松山利夫\*

### はじめに

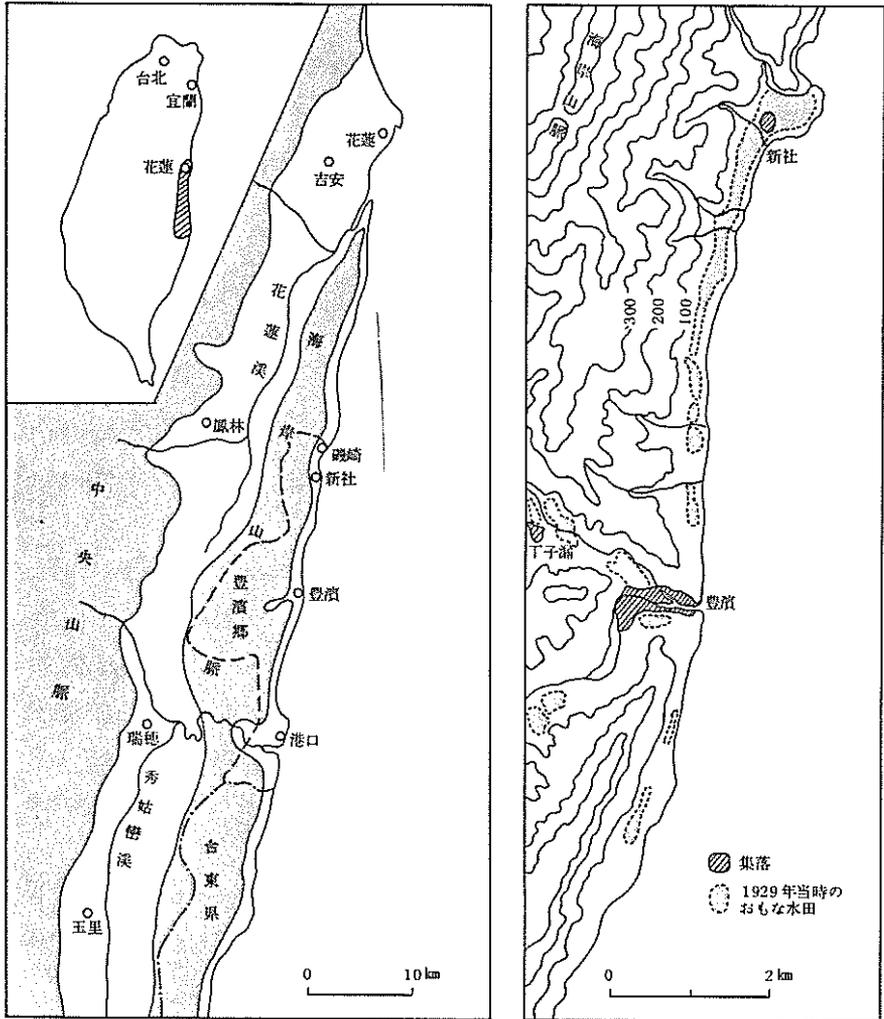
現在、台湾に栽培される稲は、いわゆる蓬莱系の品種が圧倒的に多い。かつて、総数 390 品種、栽培されることの多かったものでも 175 品種を数えた在来稲〔台湾省文献委員会編 1972: 38〕の栽培は、きわめて少なくなっている。こうした状況は、近・現代の経済開発が遅れた東部海岸地方においてもかわらない。たとえば、花蓮市に隣接する吉安郷（図 1）では、水稻作付面積約 2,100 ha のうち、蓬莱系の品種（台農 67 号・吉安 1 号）は 95% におよび、その 9 割以上を台農 67 号がしめる。あるいは、光復・豊濱郷では、同じく台農 67 号のほか、高雄 139 号などが卓越する。

しかも、その栽培に必要な諸作業は、近年の「拡大水田経営規模」事業の進展とともに、急速に機械化されてきている。この事業は、水田稲作（以下、本文中に稲作と記す場合もすべて水田稲作をさす）作業の全面的な機械化によって、生産量の増加と投下労働量の削減を目的にすすめられてきた。その結果、水田の耕起・整地と、田植え・収穫作業の機械化率は、東部海岸地方で 6～8 割に達している。したがって、これ以前に使用された台湾在来の稲作農具は、漢族（いわゆる平埔族をふくむ。以下同様）の稲作農家には見出しにくいのが現状である。

しかし、水田稲作の受容が遅れ、機械化の困難な傾斜地に小規模な水田を経営するアミ族の農家では、いまなお在来の稲作農具の使用が認められる。それは、いわゆる海岸アミ族〔馬淵 1953: 49-50〕に特徴的である。そこに残されてい

---

\* まつやま としお，国立民族学博物館



a. 調査地位置図

b. 水田の分布  
大日本帝国陸地測量部  
猫公図幅 1929より作成。

図1 調査地域の概要

る農具とその使用法とは、機械化以前（約20年以前）に、台湾におこなわれた水稲耕作の実態をかなり正確に伝えているとみられる。ここでは、こうした事実を手がかりに、かつての台湾における稲作技術の一端をあきらかにしたい。これが、この報告の直接の目的である。

これが復元できれば、農具とその使用をめぐって、近・現代における台湾と南西諸島との水田稲作技術の関連を検討する資料が得られるはずである。結論からいえば、この両地域の稲作には、いくつかの類似が指摘できそうに思われる。そのひとつに、本田の耕起・整地に使用する農具があげられよう。これらの農具のうち、マグワの一種（八重山諸島ではカタハマグ、クワペーなどとよぶ。台湾名は掛把）や、稲株や緑肥を耕土にうめこむ農具（クルバシャーまたはクウェクミンカー、台湾名は碌礮）が注意される。このふたつは、沖縄本島〔上江洲 1974〕から台湾にかけて分布する。しかもその構造は、両地域の間でまったく変化がない。

こうした農具の類似はまた、耕作法ないし耕作技術にふかくかかわるのではなからうか。それはたとえば、本田の準備期間が南西諸島でも台湾でも、ともに2カ月あるいはそれ以上の長期におよんだことと、無関係ではないと思われる。これに加えて、牛による踏耕（蹄耕）の存在は、南西諸島における近世的な稲作技術の特徴とされている〔佐々木 1984：39-40〕。この踏耕に関しては詳しい情報を得られなかったものの、それがかつて台湾東部にも存在したことを、筆者は確認している。

台湾の在来農具とその耕作法が復元されれば、少なくともこうした指摘はできるはずである。それはそのまま、台湾と南西諸島の稲作の関連についての、具体的な検討を可能にする。この報告は、このような意図をもつ。

ところで、台湾在来の稲作技術を復元するための資料は、台湾東部海岸に居住するアミ族（海岸アミ）に求めた。現在の行政区画では、花蓮県豊濱郷豊濱村に属する地域で、そこでの調査は1983年9月10日から10月24日にかけておこなっている。

この地域に資料を求めたのには、いくつか理由がある。そのひとつは、この地

域のアミ族が水田稲作を受容した時期が、ほぼあきらかだからである。既によれば〔阮 1969：155〕、その時期は1890～1900年ごろとされ、漢族から受けいられたとされる。ふたつめは、機械化がすすむ台湾の稲作にあって、この地域は在来の農具をよく残すだけでなく、その使用が現在も認められることによる。

さらに、その耕作法と使用農具には、水田稲作を受容して以後、おおきな変化がなかったとみられる。この三つの理由に加えて、豊濱村をふくむ台湾東部海岸は、東南アジアから南西諸島へとつらなる夏稲栽培地域〔高谷 1982：11, 19〕のリンクをなすこともみのがせない。

これらが、アミ族の居住する豊濱村を調査地とした理由である。

## Ⅱ アミ族の水田稲作の概況

### 1. 水田稲作の受容

稲作以前、アミ族は *lalal* とよぶ手ぐわと穂つみ用の鉄製の小刀などを使用して〔阮 1969：162〕、アワ・陸稲をおもに栽培したことは、よく知られている。この農耕は、原野を開墾し、3年から数年耕作のあと、3年ほど休閑するものであった〔臨時台湾旧慣調査会 1913：37（阿眉族南勢蕃の項）、1914：48, 1915：29-30〕。その休閑地は、四隅に植樹するかもしくは時おり草を刈るなどして、これが休耕地であることをしめしたという〔台湾旧慣調査会 1915：30〕。つまり、耕地を循環的に利用していた。これらの特徴からみて、稲作以前にアミ族が経営した農耕は、焼畑〔福井 1984：239〕だったと判断できる。

一部の低湿地にはサトイモ類を栽培したとはいえ、アミ族の主穀生産の場は焼畑に求められてきた。そのアミ族が、1900年前後の頃、水田稲作を受容したのである。水田稲作をもたらしたのは、漢族であった。このことは注意すべきである。すなわち、漢族がもたらした水田稲作は、現在われわれが知るところの、完成された稲作だったことである。アミ族はこれを受け入れた。栽培された稲は、漢族がもたらしたインディカに属する台湾在来稲とみられる。水稲栽培に必要な農具も、漢族が使用するものを、おそらくそのまま受容したであろう。これらの

農具は、焼畑で使用したものと著しくちがっていたはずだからである。

その後、この地方には漢族の拓殖がつづく。これを考えあわせれば、少なくとも海岸アミ族——より厳密には豊濱村のアミ族——の稲作への日本農業の影響は、ほとんどなかったとみてよい。

台湾東部海岸の拓殖 このあたりの事情をもう少し詳しく検討してみよう。東部海岸の漢族による開拓は、北部にはじまりついで南部に開拓拠点を設けて展開した〔伊能 1904〕。すなわち、1790年代の後半から1810年ごろにかけて、宜蘭平原の濁水溪北部に漢族が開拓入植する。ついで1812年には、濁水溪南部の山地民にたいして開墾・耕作を奨励する。一方、台東地方を中心とする東南部の開拓は、1875年の東西連絡3路の開さくにはじまる。この道路の開通にともなうて、東部への漢族の移住が増加しはじめ、海岸アミ族の居住域の一部に、この頃、漢族による開田がおこなわれた。しかし、当時のアミ族はなお伝統的な焼畑農業に従事しており、水田稲作はまだ受容していなかった。その後1885年になって、アミ族を主とする山地民への耕作法の伝授を目的に、各地に撫墾局が設置される。こうした経緯ののち、漢族による台湾東部の開拓は、1887年から本格化する〔伊能 1904：115-268〕。これをうけてアミ族では、1900年前後のころに、水田稲作を開始した〔阮 1969〕。しかし、水田の造成方法と技術の詳細については、明らかでない。海岸山脈の西、中央山脈との間にひろがる秀姑巒平原のアミ族（秀姑巒アミ族）の場合は、*palyu*とよぶ神話ないし伝説上の祖先を同じくする集団（成員は集落をこえて分布する）内の労力交換によって、水田を造成したと伝えているにとどまる。

いずれにしろ、アミ族が水田稲作を受容した時期と相前後して、日本の台湾領有（1895～1945年）がはじまる。その期間は、アミ族の間に水田稲作が定着する時期とかさなるのである。それにもかかわらず、少なくとも豊濱村におけるアミ族の稲作への、日本農業の直接的かつ組織的な影響がなかったとみるのは、つぎのような事実にもとづいている。すなわち、当時の花蓮港庁への日本農民の入植が、花蓮港南部平原から花蓮溪西部の平原に限られ、海岸山脈東部の狭少な海岸段丘での日本人による水田稲作経営が認められなかったからである。

日本農民の入植の経過 台湾東部への日本農民の入植は、私的なかたちをとってはじまる。当時の花蓮港庁への入植は、1906年が最初であった。これが官制移民に移行したのは、3年後の1909年のことである〔持地 1912：415-416〕。これをうけて、花蓮港の南西の七脚川（現在の吉安郷吉安）に、翌10年移民指導所が開設され、同じ年の3月にここ七脚川へ9戸20人の日本農民が入植する。これが組織的な入植のはじまりとなり、同年内の七脚川への農業移民は約60戸300人弱を数える。11年には七脚川をはじめ、近い将来の入植適地につぎつぎと日本名が附され、七脚川は吉野村（現、吉安）、水尾は瑞穂村（現、瑞穂）、璞石閣は長良村（現、玉里）、鳳林は林田村（現、鳳林）などに変えられた（現地名との比定は陳〔1960〕によった）。いずれも花蓮溪から秀姑巒溪にいたる台東縦谷の秀姑巒アミ族や海岸アミ族の一部の居住域に位置する。そこへの入植は、七脚川をのぞいて、1912年以降におこなわれてきた。そこでの農業は、まず畑作としてはじめられる。たとえば七脚川の場合、1912年当時の栽培作物はサトウキビが全耕地面積の8割を占め、蔬菜・サツマイモ・アワがつづき、水稻の栽培はまだみられない。わずかに陸稲が、一・二期作あわせて2%ほど作付けされたにすぎなかったのである。水稻は、翌13年の一期作から、ようやく栽培されはじめる〔東郷 1914：517-591, 610-611〕。

こうした日本農民による台湾東部への入植は、台東縦谷の平原に限られ、海岸山脈の東部へでることはなかった。したがって、豊濱郷に居住する海岸アミ族の稲作への、日本農業の直接的かつ組織的な影響はなかったとみてよい。

## 2. 水田耕作

海岸アミ族が水田稲作を受容して20数年のちの1925年に、当時の花蓮支庁で栽培された水稻品種は、中村〔1925：21-22〕によれば、一期作が10品種と報告され、磯ら〔1924：16〕は6品種と在来種と記録している。また、二期作では12品種〔中村 1925：3〕ないし5品種と在来種〔磯・伊藤 1924：16〕と報告する。いずれにしても、これらはいわゆる蓬萊系以前の品種群である。

ところで、蓬萊系の品種は、もともと台湾在来種と日本内地種を交雑育種した

ものであり、前者がインディカであったこと〔渡部 1984：70〕からみて、中村や磯らの報告する水稲は、インディカだと判断できる。ただし、この当時、一期作と二期作との中間季に栽培された稲は、少なくとも花蓮港庁管内には記載がない。その分布は、台中庁下に限られていた〔磯・伊藤 1924：13, 中村 1925：1〕。したがって、海岸アミ族が栽培した水稲は、中間季に栽培する稲を含まなかった。さきに、アミ族は完成した水田稲作を受容したと述べたのは、この意味においてである。その稲作は、一・二期作ともに受けいれられたとみられる。

ところで、アミ語には水・陸稲を区別する語彙はなく、両者ともに *tipos* (豊濱村)あるいは *panai* (港口村〔阮 1969：158〕)とよぶ。これは、水稲受容以前から焼畑で栽培してきた陸稲の名称を、そのまま水稲にも転用したことに基づいている。

水稲栽培の順序 いずれにしても、海岸アミ族をはじめとする花蓮港庁管内に居住したアミ族の水稲栽培は、『番族慣習調査報告書』〔臨時台湾旧慣調査会 1915：31-32〕によると、表1のとおりであった(なお、個々の農具は後述する)。

相対的に詳しく記載された一期作を例にとると、11月中旬(以下すべて旧暦)に苗代へ播種し、1月に本田へ移植する。その苗代期間は40～50日におよんだ。移植にさきだつ本田の耕起は、二期作収穫後の休耕中の水田を犁でおこすことから始める。ついで掛把(クワペ)で土塊を砕き、水を入れたあと再び同じ作業を犁→掛把の順でおこなう。さらに手把(まぐわにあたる)で土をならし、手把に竹または木の棒をつけて表面を均一にし、移植する。

田植えは前方の畦に対して横一列にならび、後退して植える。施肥は原則としてしない。除草は2回おこない、田植え後30日と50日ごろであった。収穫は根刈りで5月下旬～6月下旬におこない、ただちに稲打桶で脱穀する。

『番族慣習調査報告書』にこのように記載されるアミ族の、1915年ごろの水田経営には、いくつかの特色が認められる。そのひとつは、苗代期間が40日ほどと、きわめて長いことである。第二には、本田の耕起が犁や掛把、手把などを用い、2度にわけておこなわれる点である。これに加えて、第三に、収穫した稲

表1 1915年ごろのアミ族の水稲栽培（一期作）

区 分	作 業 内 容
苗代の整地	(記載なし)
苗代期間	旧11月中旬～旧1月ごろまで、約40日。
本田の整地	① タベ(犁)→クワペ(掛把) ② 水を張ったあと、タベ→クワペ→カルツ(まぐわ)→カルツ・スピツ*
田 植 え	1人5株ずつもち、前方の畦にむかって横一列にならび、後退しつつ植える。
施 肥	特にほどこさず。
除 草	1回め：田植え後、約20日。 2回め：田植え後、約50日。
収 穫	旧5月下旬～旧6月下旬、根刈り。
脱 穀	収穫後、ただちに稲打桶で脱穀。
運 搬	牛車。
乾 燥	2～3日、前庭で乾燥。
貯 蔵	穀倉(アリリ)に籾のまま。

臨時台湾旧慣調査会 1915：31-32 より作成。

\*スピツは豊濱の *samolih* に同じ(図3参照)。

の脱穀が稲打桶でおこなわれる点があげられる。この稲打桶は、後述するように大型で深いたらいような桶で、この中の稲打梯子に稲束をたたきつけ、脱穀する農具である。こうした打撃による脱穀は、種子の脱落性の相対的な高さをおもわせ、注意される。

これらの特色は、現在の豊濱村における水田経営にも共通して認められ、基本的には当時とまったく変化がない。それは、使用する農具についても同様である。たとえば、苗代田および本田の耕起・整地に用いる犁、掛把、手把、脱穀用の稲

打桶など、当時のもの〔臨時台湾旧慣調査会 1915：171〕と同じものが、現在も用いられるからである。

### Ⅲ アミ族にみる台湾在来の水田稲作

豊濱村とその周辺に居住する海岸アミ族の、現在の稲作暦はほぼ表2のとおりである。一期作は1月上・中旬（新暦、以下同様）の苗代への播種にはじまる。ついで2月上旬に本田に移植し、4月から6月上旬まで降雨を利用して、水稻を栽培する。一期作の収穫は6月下旬から7月10日前後におこなわれ、ひきつづき二期作にうつって、11月に二期作を収穫している。その間、一・二期作とも2～3回除草する。

こうした稲作暦にしたがって、以下では耕作法の詳細と使用農具について記載する。

表2 水田稲作暦の概要

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
旬												
苗代田	△-△-□						▲-■					*-*
本田	---*---□	—————					▽▽					*-----
	第二回											第一回

\*耕起・整地, △播種, □移植, ▽収穫  
いずれも黒ぬりは二期作を示す。

#### 1. 水田の耕起と整地

苗代田 現在、豊濱村とその周辺では、1月上・中旬の播種に先行して、苗代田の耕起と整地をおこなう。それには犁*tabi*を水牛にひかせて耕起し、手把

*kalut*で土塊を細かく砕き、水を入れたあと *samolihi* で整地する。一方、種籾 *panai* は袋に入れて2～3日水に浸したあと取り出し、サトイモの葉をのせて再び3日ほどおいて発芽させ、苗代田に播種する。

この苗代田では、かつて長床型の *tabi* を用いた。伝承によれば、この犁は水田稲作の受容と同時に漢族からもたらされたといわれる。最近では、短床型の犁 *tabi* (図2) が多く用いられる。その使用法は、本田の耕起とかわらない。これにつづく碎土作業には、手把 *kalut* を使用する。この農具は日本のまぐわとまったく同様の形態をそなえ、現在使用するものとさきに引用した

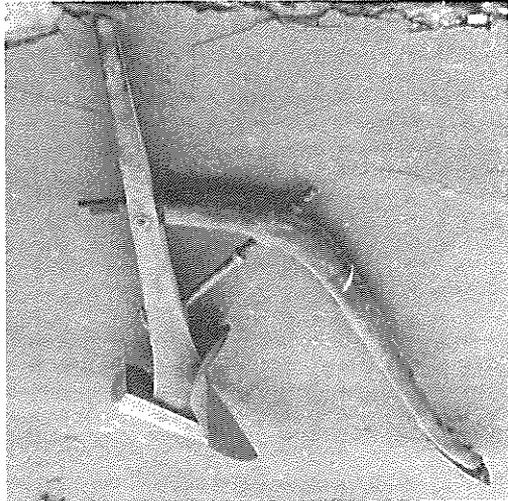


図2 短床型の犁

『番族慣習調査報告書』の記載するものとの間にも差がない。この *kalut* の歯の部分に竹または棒をとりつけ、耕土を平滑にするのが、*samolihi* である(図3)。

こうして苗代田の整地をおえると、粃まきにうつる。その際には、*nifutick-to-kawasu* という一種の予祝儀礼が、1950年ごろ以前までおこなわれてきた。*nifutick* は、容器に入れた酒を指ではじいて捧げることというほどの意味で、古くは日常生活のなかでの酒宴においても、それを始める前に酒を指ではじいて、祖先に捧げたといわれる。*kawasu* はうねをさす。つまり、*nifutick-to-kawasu* は、稲の豊饒を祖先に祈って、酒を田に注ぐ行事である。これは、粃まきにさきだっておこなわれたらしい。

本田の耕起と整地 *palinanun* とよぶこの作業は、2度にわけておこなうのを本来とした。その第1回は、田植え(2月上旬)2カ月前の12月で、*tabi* で耕

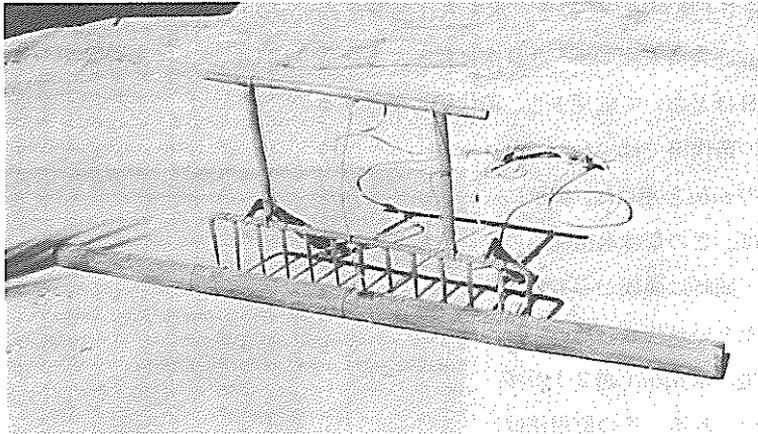


図3 *kalut*に*samolihi*をとりつけた状態。  
この*samolihi*は竹製で長さ227 cm。

起し、掛把*sasnut*で碎土する。その目的は、二期作(一期作のみの水田では一期作)収穫後の休閑期間中に生育した雑草や刈株を埋め込み、くさらすことにあるという。水は入れない。第2回めは田植え直前の耕起で、田に水を入れておこなう。この場合には、不整形な田の長辺に沿いかつ犁*tabi*の幅2回分を残して、つまり畦*ligi*のやや内側を、左まわりに耕起する。犁歯は前方右側に傾斜するため、耕土は田の畦寄りへ反転される。ついでその内側を、右まわりにすく。さらに、最初*tabi*の幅2回分を残した畦寄りの部分へ右まわりに犁を入れ、*ligi*ぎりぎりまで耕起する。したがって、この部分の耕土は田の内側にむかって反転される。残されている中央部は、左まわりに渦巻き状にすき、本田の耕起をおえる。ただし、1区画の水田が大きいものにあつては、中央部に犁を入れて田を二分し、それぞれを渦巻き状に耕起する。

これにつづく耕土の碎土と整地には、*sasnut*、*kalut*、*samolihi*を用いる。*sasnut*は図4のような構造をもち、中央2枚の板上に農夫がのり、水牛にひかせて使用する。その目的は、*tabi*ですきおこした土塊を砕くことにあり、まず水田*vunun*の一端から左まわりに回転しつつ水田面をひとまわりする。ついでこれに交叉するように、もうひとまわりして碎土する。このあとまぐわ*kalut*を、*sasnut*

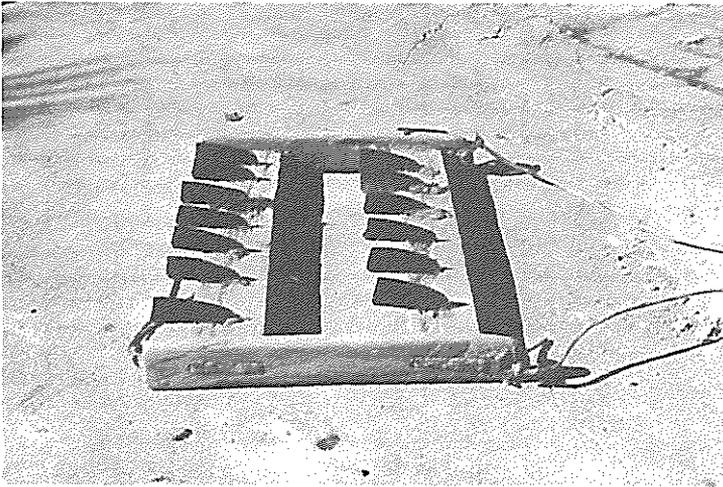


図4 *sasnut* (碎土面を示す。)

と同じようにして水田面をひきまわし、碎土する。そして最後に *kalut* に竹棒 *samolihi* を固定したもので耕土を平滑にする。その使用法は、*sasnut* やまぐわ *kalut* とかわらない。

踏耕 通常はこのようにして本田の耕起と整地の作業 *palinanun* がおこなわれる。しかし、湿田（膝まで没する田）の耕起には、犁 *tabi* も *sasnut* も用いない。この場合には、水牛を5～6頭つなぎ、田の中をぐるぐる歩かせる踏耕によって耕起する。これによって雑草・刈株を埋め込むと同時に耕起し、まぐわ *kalut* を1～2回かけるか、または *lattakk* (図5) を入れ、*samolihi* で整地する方法がとられる。こうした踏耕は豊濱村に隣接する磯崎・新社村の一期作地帯に卓越した。台湾東部の夏稲地帯における踏耕の存在は、東南アジア島嶼部から日本の南西諸島をつなぐものとして、きわめて興味深い。

## 2. 移植と除草

田植え *mianip* とよぶ田植えは、一期作が2月上旬、二期作は8月上旬におこなう。しかし、現在の台湾では米が生産過剰ぎみといわれ、水がかりが悪いな

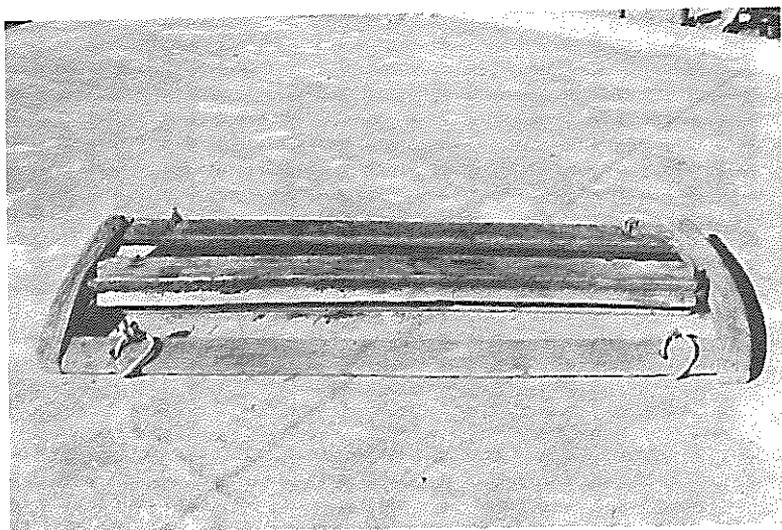


図5 *lattakk*。水牛にひかせて使用する。  
中央の齒車が回転し、碎土・整地する。  
たて75 cm, 横2 m。

ど相対的に劣等な水田には作付けされていない。

田植えは男女ともにおこなうが、厳密な意味での正条植えではなく、またそのための農具もない。苗は畦 *ligi* に沿うように植えられる。まず各自7株ずつを手に、水田の短辺をなす畦にむかって横一列にならび、左右を考慮しながら、後退して植えすすむ。もう一方の短辺に到達するとむきをかえ、同様に植える。

苗とりは、ヘラ状の平たい苗とりぐわ *tansi* を用いる(図6)。これを竹製の苗かご *kanas* (図7)に入れ、竹の天坪棒 *onots* で本田へ運ぶ。植え付けにあたっては、苗の入った *kanas* を直径42 cm・深さ13 cmの苗桶 *tantun* に入れ、この苗桶を水田にうかせておいて苗の補給にあてる。苗の先を切断することは、少なくとも一期作についてはおこなわない。田植えに必要な労力は、1 haの水田1日当たりに換算して、苗とりに1~2人、苗の運搬に2人、植えるのに8~10人とされ、最大14人が必要だとされている。これは、共同労働でまかなわれる。

こうして田植え *mianip* をおえると、*pakalag* をおこなう。これは田植えの終

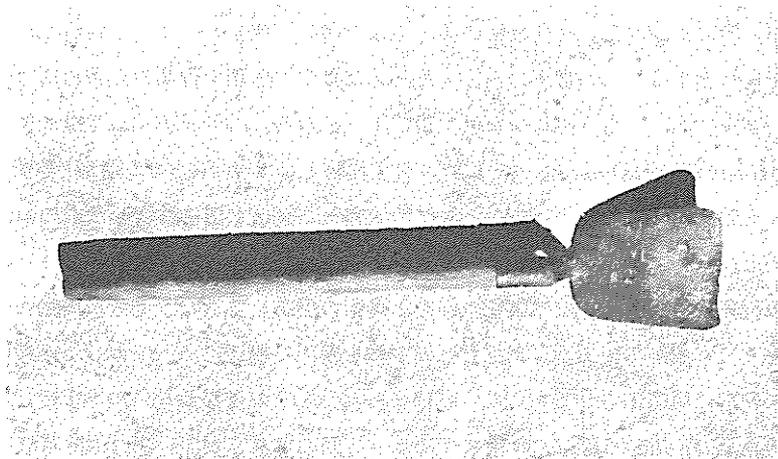


図6 苗とりぐわ *tansi*。全長 48.5 cm。

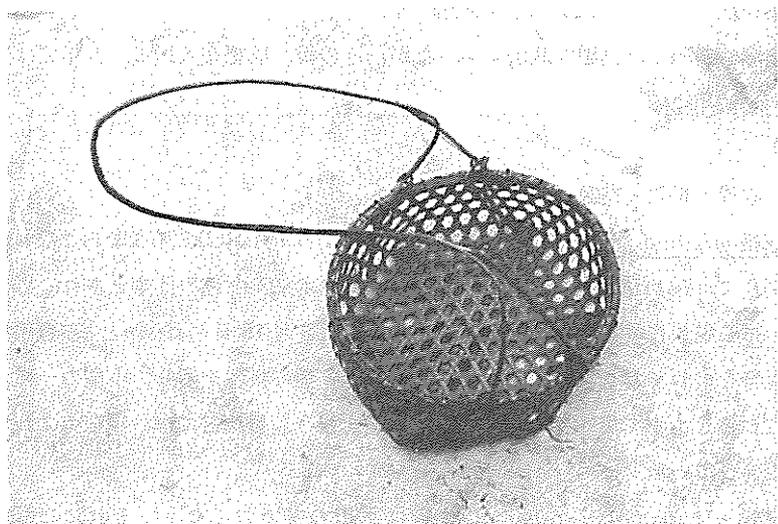


図7 苗かご *kanas*。最大径 45 cm。

了と稲の豊収を祝う家ごとの行事で、田植えの翌日に家族のなかの男性が海または川へ漁にでかける。女性は家にあつて米の餅その他をつくり、これらと魚・酒を一家で供する。この行事のあと、たとえば喪中で魚類や青菜の食用を禁じられていた家にあつても、それらを供し得るようになる。この *pakalag* と靱まきの儀礼 *nifutick-to-kawasu* は、かつてアワを主作物とした当時にアワの播種と移植にともなう各種の儀礼のいくつかが、稲作の受容とともに水田に移行したものである。阮 [1969: 293-298] によると、*pakalag* はアワの移植時におこなわれる狩猟・漁撈をともなう儀礼のうち、最後の漁撈をともなう部分が残されたものとみられるからである。ただし、天主教を奉ずる農民にあつては、この種の儀礼が非常に簡略化されるか、ないしはまったくおこなわないのが実情である。

除草 *mikapkap* 除草は収穫までに2~3回おこなうが、いずれも除草具は用いず、草を手で耕土中に埋め込んでおわる。この場合、指を保護するため、漢族の間では人差指・中指・薬指に長さ3cmほどの竹管をはめることや、台東地方のアミ族では除草に *lalal* を用いたことが報告されている [渋谷 1921: 36-37]。しかし、豊濱村とその周辺では、これらの農具の使用は確認できなかった。近年はこの地方においても除草剤を使用する。

施肥 かつては無肥料栽培であったが、その後、堆肥を入れる。近年では化学肥料を使用する。

### 3. 収穫と脱穀・精製

収穫 *mipanai* 一期作の収穫は、6月下旬から7月10日ごろまでおこなわれる。根刈りで、鎌 *pitaun* を使用する。刈り取りは本来、女性の仕事とされ、男性はもっぱら脱穀に従事した。なお、収穫祭は旧暦8月15日に *ilisin* とよぶ豊年祭が月見祭をかねておこなわれ、ビンロウの葉に各種の料理をもち、小型の一種の箕にごはんをもって屋外でこれを供し、豊作を祝う。豊濱村では、現在もこれがおこなわれている。

脱穀 *mipatsupatsu-to-panai* 脱穀は水田の中でおこなう。それには稲打桶 *pawasan* を水田にもちこみ、刈りとった稲をこの桶の中においた稲打梯子 *tsatsa*

にただちに打ちつけて脱穀する。稲打桶 *parwasan* は図 8 に示すような半円型の桶で、底部には幅 8 cm・高さ 7 cm の角材がとりつけられている。これは、刈り取りが進むにつれて桶をすべらせ移動させるための滑走面となる。一方、*tsatsa* は厚さ 0.5 cm・幅 2.5 cm の鑄鉄製の歯 9 枚を埋め込んだ道具で、図 8 のように

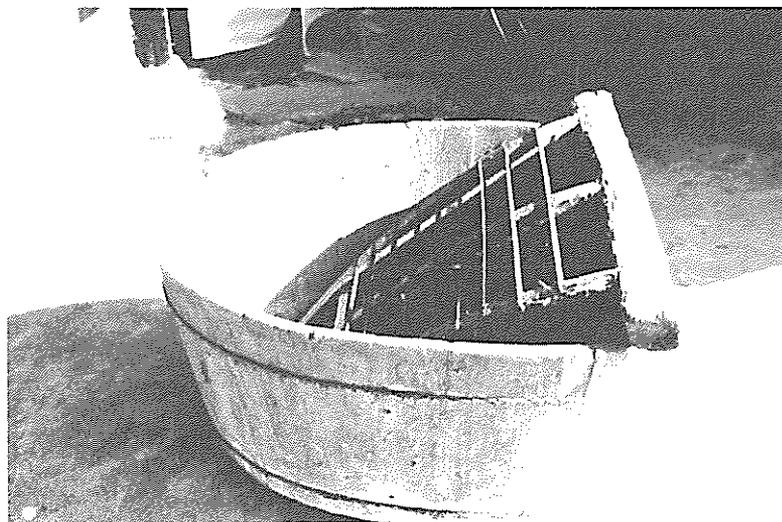


図 8 稲打桶 *parwasan* と稲打梯子 *tsatsa*

*parwasan* にセットする。この状態では打ちつけられた籾 *panai* が飛散するため、さらに *parwasan* の内側に長さ約 7 m の竹をひもで固定し、これに黄麻の繊維で編んだ網を三方にめぐらす。この *parwasan* と *tsatsa* は、『蕃族調査報告書』の図〔臨時台湾旧慣調査会 1914：36〕や、「パワス 穀物ノ穂ヲ落スモノ」〔臨時台湾旧慣調査会 1914：50〕とあるのと同じ農具である。

籾の選別には、*savitai* と *basulani* を使用する。*savitai* は竹製のまるい箕で（図 9）、同じく竹製の敷物 *basulani* のうえで風選する。

貯蔵 選別した籾は袋に移し、牛車などで家にもちかえり、2～3日、天日で乾燥する。この作業にも *basulani* を敷き、そのうえに *sakale*（図 10）で籾をひろげる。乾燥した籾は、そのまま貯蔵する。貯蔵庫 *alili*（図 11）は母屋とは別

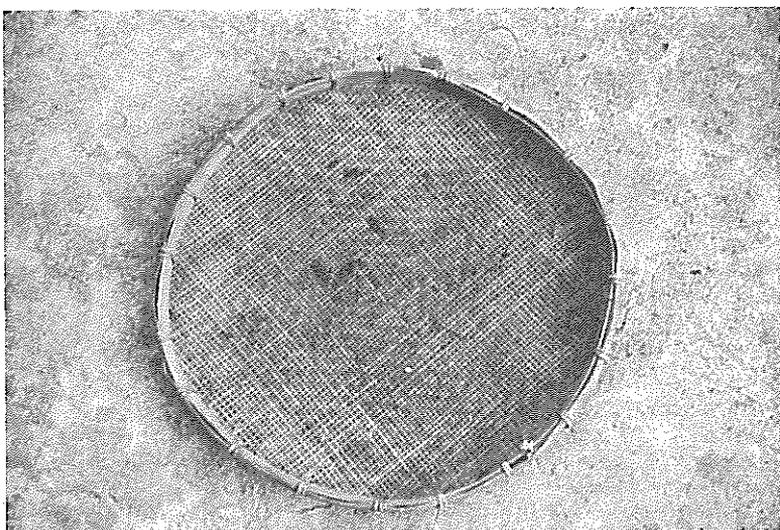


図9 箕 *sōvitai*。最大径 70 cm。

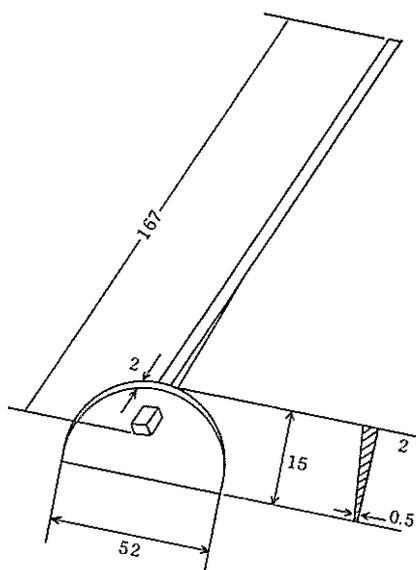


図10 *sakale* (単位 cm)

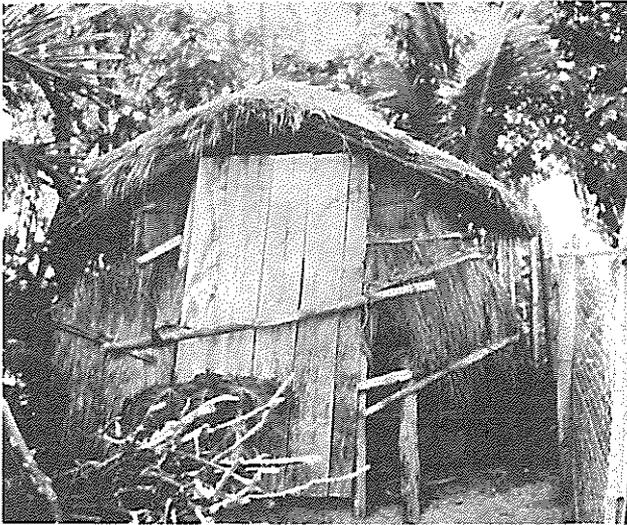


図 11 伝統的な穀倉 *alili* の例

の独立した建物で、伝統的には竹・カヤ葺き、地上 50cm ほどの高床の小屋であった。現在では一部にトタン葺きのものを残すものの、ほとんどがコンクリート製の貯蔵庫に変っている。この貯蔵庫は地面から直接たちあがり、かつ気密性が高いために温度の自然調節が困難である。そのため、ここに貯蔵した籾は、従来に比較してかなり味が落ちるといふ。貯蔵庫の規模は、床面積で 3～5 m<sup>2</sup> のものが多い。

精白と炊飯 精白は必要に応じてそのつどおこなう。石または木製の臼 *tivəkuan* に籾を入れ、石の堅杵 *asolu* (図 12) について玄米にする。もちろん、一挙に玄米が得られるわけではなく、ひと臼つくとこれを箕 *səvitai* に移し、少量ずつ篩 *atabus* (図 13) でふるって籾・籾殻と玄米とを選別する。篩に残った籾はもう 1 度石臼にもどし、同じ作業をくりかえす。さらに糠を *atabus* で取り除く。この *atabus* は、10 cm<sup>2</sup> に 530 のめをもつ竹製の篩で、多くは漢族から購入して使用する。こうした精白作業時の籾や米の運搬には、トウ製のカゴ *bahal* (直径 59 cm、深さ 29 cm、底部の最大幅 35 cm、図 14) を使用する。



図12 臼 *tivokuan* と 杵 *asolu*

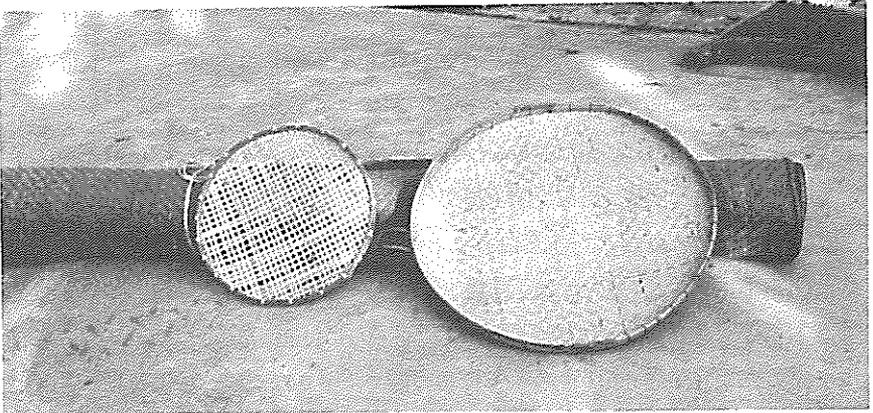


図13 箕 *savitai* (右), 篩 *atabus* (左) と  
竹製敷物 *basulani*

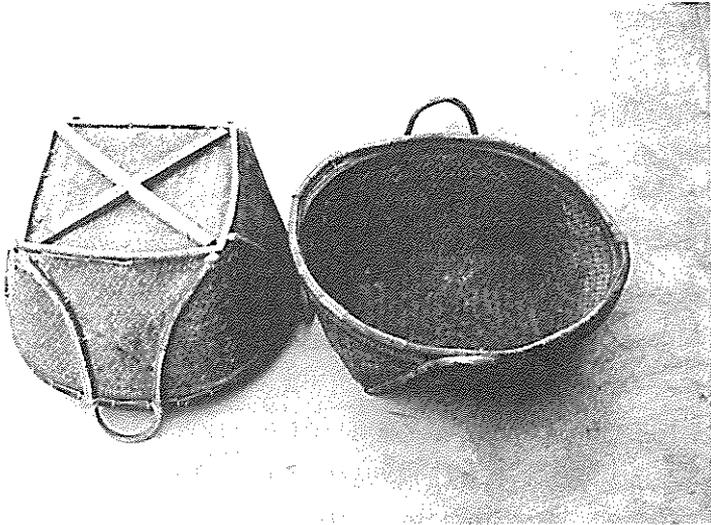


図 14 穀物運搬かご *bakal*

米は羽釜 *siue* でたく。もち米の場合は土製の蒸器 *kalaga* でむす。この *kalaga* は中央部がくびれており、その部分に穴のあいた土製の板をのせ、下部に水を、上部に米を入れて使用する。餅つきには精白に使う石臼と竝杵を用いる。

羽釜でたいたるち米は、直径 40 cm ほどの箕に類似した容器 *tapila* に移し、かつては手でつまんで供した。こうした作法は、アワを主穀物とした当時からのもので、「粟ノ煮タルモノヲ箒ニ入レ、ソレヲ各自右手ノ三本指ニテ抓ミ取り、一口嚼ミテ餘リタルモノハ再ヒ箒ニ入レ」〔臨時台湾旧慣調査会 1913：45（阿眉族南勢蕃の項）〕で供した。現在は碗を使用する。

#### Ⅳ ま と め

アミ族が保有し使用する水田稲作農具は、いずれも水田稲作の開始と同時に漢族から受容したもので、かつての焼畑耕作具と共通する農具はない。わずかに台東地方のアミ族に、水田の除草用具として、焼畑用の手ぐわ *lalal* の使用が認め

られたにとどまる。したがって、これまで述べてきた稲作農具は、機械化以前の台湾の在来農具である。それ自体は、たとえば渋谷〔1921〕などの報告があるが、それらでは使用法の詳細が不明であった。この点の記載を試みた結果、この報告の冒頭に述べたようないくつかの特色が明らかになり、その一部はわが国南西諸島、とりわけ八重山地方と共通することが発見された。

くりかえしになるが、これらをもう一度整理しておきたい。その場合、アミ族の現在の、ないしやや伝統的とされる水田稲作は、基本的には稲作受容期(1900年前後のころ)とまったく変らないことを注意すべきである。とくに八重山地方との関連の有無を考慮するとき、この前提は非常に重要である。

さて、アミ族は本田の準備に約2カ月を費している。田植え2カ月前の第1回の耕起と、田植え直前の耕起・整地とである。12月下旬ないし1月上旬の第1回の耕起は、雑草や刈り株を埋め込むとともに、寡雨期(12~2月)の降水〔台湾省文献委員会編 1972:9〕を効果的に利用する目的があったのではないと思われる。なぜなら、豊濱村とその周辺の水田は、多くが水がかりの悪い田とされるからである。これらでは、現在、一期作のみがおこなわれる。

こうした2度にわたる本田の耕起が、仮りに保水性を保つことにあるとすれば、その目的も長期におよぶ本田の準備も、八重山地方と類似する。しかも、湿田の場合には、水牛5~6頭による踏耕がおこなわれた。これは耕起そのものが目的で、すでに述べたように(Ⅲ章1.)、これをおこなう水田では犁*tabi*や*sasunut*といった耕起具を用いない。これはいわゆる耕耘型の踏耕〔田中・古川 1982〕である。こうした踏耕は、直播きとほぼ対応することが指摘されている〔上山・渡部 1985:78〕。しかし、海岸アミ族はこの種の水田でも田植えをしたといい、直播きの有無は確認できていない。農具との関係では、踏耕による耕起と*lattakk*(南西諸島でクルバチャーとよぶ農具)とが対をなした可能性が考えられる。なお、この*lattakk*と*sasnut*は、1930年代に台湾から八重山諸島へもたらされている〔松山 1984〕。

こうしたアミ族にみる台湾在来の水田稲作、とりわけ本田準備における踏耕の存在は、南西諸島と東南アジア島嶼部をつなぐものとして興味深い。しかしなが

ら、この踏耕に代表されるような東南アジア的要素の来歴は、明らかでない。それにはふたつの可能性が考えられよう。ひとつは台湾に水田稲作が渡来したあと、東南アジア的要素を受け入れたとする解釈である。いまひとつは、台湾の水田稲作のふるさとである福建地方の稲作が、すでに東南アジア的要素をもっていたとする解釈である。仮りに後者の場合を想定すると、福建地方の水田稲作は、たとえば江南の稲作とは性格のちがったものだと思像できる。いずれにしても、台湾在来の水田稲作をより正確に位置づけるには、こうした問題の解明が急がれる。

ひるがえって、アミ族の水田稲作だけに限っても、なおいくつかの問題が残されたままである。そのひとつは、焼畑耕作から水田稲作への移行ないし転換が、どのようにおこなわれたかである。また、水田稲作の受容後、従来はかえりみられなかった土地があらためて評価されるといった、アミ族の土地評価の変化〔臨時台湾旧慣調査会 1915：29〕も不明のままである。これらの問題は、台湾の水田稲作の位置づけとあわせて、究明されるべきことがらであり、他日を期したいと考える。

附記 この報告は、国立民族学博物館の特別研究「日本民族文化の源流の比較研究」(研究代表者 佐々木高明)の昭和58年度海外調査の成果の一部である。

#### 引用文献

陳 正祥

1960 『台湾地名辞典』 敎明産業地理研究所。

福井 勝義

1984 「焼畑農耕の普遍性と進化——民俗生態学的視点から——」 著者代表大林太良  
『山民と海人——非平地民の生活と伝承——』 pp. 235-274, 小学館。

阮 昌銳

1969 『大港口的阿美族』 上・下冊, 中央研究院民族学研究所。

伊能 嘉矩

1904 『台湾蕃政志』 古亭書屋。

磯 永吉・伊藤 勝治

1924 「水稻品種及其分布面積」 『台湾總督府中央研究所農業部彙報』 13号：1-56,  
台湾總督府中央研究所。

馬淵 東一

1953 「高砂族の移動および分布(第2報)」『季刊民族学研究』18(4): 23-72。

松山 利夫

1984 「与那国島における水田の分類と在来の稲作農具」渡部忠世・生田滋編著『南島の稲作文化 与那国島を中心に』pp. 263-294, 法政大学出版局。

持地六三郎

1912 『台湾殖民政策』富山房。

中村寅次郎

1925 「稲の品種及其分布面積統計」『台湾総督府中央研究所農業部彙報』28号, 台湾総督府中央研究所。

臨時台湾旧慣調査会

1913 『蕃族調査報告書 阿眉族南勢蕃, 同馬蘭社, 卑南族卑南社』臨時台湾旧慣調査会。

1914 『蕃族調査報告書 阿眉族奇寮社, 同太巴壠社, 同馬太鞍社, 同海岸蕃』臨時台湾旧慣調査会(台湾日日新報社印刷版)。

1915 『蕃族慣習調査報告書 第二卷』臨時台湾旧慣調査会。

佐々木高明

1984 「南島の伝統的稲作農耕技術」渡部忠世・生田滋編著『南島の稲作文化 与那国島を中心に』pp. 29-66, 法政大学出版局。

波谷紀三郎

1921 『台湾之農具』台湾総督府殖産局。

台湾省文献委員会(編)

1972 『台湾省通史 卷四經濟志農業篇』

高谷 好一

1982 「南島の稲作とその歴史・生態的背景」渡部忠世編『南西諸島農耕における南方的要素』(科研報告書) pp. 3-22。

田中耕司・古川久雄

1982 「踏耕の系譜」渡部忠世編『南西諸島農耕における南方的要素』(科研報告書) pp. 23-51。

東郷 実

1914 『台湾農業殖民論』富山房。

上江洲 均

1974 『沖縄の民具』慶友社。

上山春平・渡部忠世(編)

1985 『稲作文化 照葉樹林文化の展開』中央公論社。

渡部忠世

1984 「八重山の稲の系譜 — 蓬莱米と在来稲」 渡部忠世・生田滋編著『南島の稲作文化 与那国島を中心に』 pp. 67-91, 法政大学出版局。

## コメント

高 谷 好 一

この論文ではアミ族の伝統的水田耕作が記述されている。しかし、これは単なる記載ではない。台湾を東南アジア、中国の福建、日本の南西諸島の中央に位置するものとしてとらえ、この要を通じて、東南アジアや福建の技術が、わが南西諸島にいかにして伝播してきたかについても分析を試みている。

同論文の「まとめ」では、おおよそ次のようなことがいわれている。

1. アミ族固有の農業は焼畑だが、焼畑耕作具は現在では、ほぼ消滅している。
2. アミ族が行なう水稲耕作は1900年頃台湾の漢族から導入されたものである。
3. アミ族の水稲耕作は南西諸島のそれに共通している点が多い。特に蹄耕の存在はその典型例である。
4. 東南アジア起源と考えられている蹄耕のアミ族における来歴は不明である。しかし、「それにはふたつの可能性が考えられよう。ひとつは台湾に水田稲作が渡来したあと、東南アジア的要素を受け入れたとする解釈である。いまひとつは、台湾の水田稲作のふるさとである福建地方の稲作が、すでに東南アジア的要素を

もっていたとする解釈である。」

さて、上記の松山氏のまとめの特に最後の部分に関して、今ひとつ違った解釈を申し立て、私のコメントとしたい。私の解釈は「アミ族の焼畑技術の中には最初から踏耕技術があった。福建からは犁耕だけが導入された」というものである。

焼畑の中に蹄耕があったという表現は理解され難いかも知れない。それで、東南アジアの場合のことを述べて、このあたりの所を少し明確にしたい。東南アジアの焼畑では森を伐開し、焼き、その上に稗を点播する。たいていの所は斜面であるから、発芽した稲はオカボとして成長する。しかし、斜面脚部や一部の凹地はやがて雨季に入ると灌水し、点播した稲はまるで水稲のように成長する。ところで、もっと湿地的な所でも、彼等はしばしば利用する。例えば崖下の湧水地とその周辺である。こういう所には大木がなく、背の高いカヤツリグサが生い茂っている。ここに水牛を追い込んで、カヤツリグサをなぎ倒し、踏みにじらせ、泥と混ぜて、泥沼を作り、その上に稗を散播したり移植したりする。いわゆる蹄耕である。こうして東南アジアの焼畑の中には蹄耕が含まれている。

私共東南アジア屋の常識からすると、結局、焼畑とは斜面でのオカボ栽培と、湧水地などでの蹄耕・水稲作の複合である。斜面、低湿地とも通じていえることは、犁は

おろか鋤，鋤の欠如である。稔った稲は穂摘みし，束にして貯えておく。しばしば水牛を供儀する複雑な耕作儀礼を伴っている。これに対して，いわゆる水稻耕作は犁耕，鎌刈りを基本技術とし，入念な儀礼を欠いている。この水稻耕作は東南アジアでは，インドから新しく入った外来技術と考えられている。

こんなことが実態である東南アジア側からすると，先に述べたような解釈もしてみたいのである。ついでにいうと，南西諸島の蹄耕も，これまた，古層の焼畑ともなう技術であると考えたい。そう考えたほうが李朝実録に現れた蹄耕などもよりスムーズに解釈できる。

ところで，松山氏の示唆の中で，私が今大変気にしているのは，やはり，まとめの中で同氏のいう「福建地方の水田稲作は〔東南アジア的要素を持っていて〕，たとえば江南の稲作とは性格のちがったもの」かも知れない，という所である。私自身は福建稲作は江南に近いものではなからうかという推察をしている。しかし，あるいはその基層には，同氏のような東南アジア的なものがあるのかも知れない。これは

又，極めて興味ある問題である。

最後に著者は「焼畑耕作から水田稲作への移行ないし転換」を問題にしている。この問題も「蹄耕をともなう焼畑」という視点を入れると，面白いかも知れない。著者は前段で「農具との関係では，踏耕による耕起と *lattakk*（南西諸島でクルバシャーとよぶ農具）とが対をなした可能性が考えられる」としている。東南アジア側からすると，これは極めて納得し易い指摘である。東南アジアの場合だと大勢は次のようになっている。すなわち，湧水地周辺などの旧蹄耕地にはクルバシャーが導入されている。一方，広大な海岸平野は犁の導入によって開かれた新開水田地である。こんなことがあるものだから，私など，クルバシャーを見るとすぐ焼畑を連想する。

東南アジア，中国，日本に展開する稲作を系譜的に考えようとする時，台湾は最重要の戦略拠点である。日本，東南アジア，そして可能なら中国側からも参加して，この松山論文を素材にして意見を出しあえば，ずいぶん面白い議論が展開しうるのはなからうか。

（京都大学東南アジア研究センター）